

# あなたは病気になるはずがない

## 1992年 KKロングセラーズ

林 秀光 (はやしひでみつ)

神戸大学医学部卒、医学博士、「水の会」主幹、医療法人誠仁会協和病院顧問、全国日本学士会会員、1991年「第14回ニューヨーク国際発明EXPO」にて金賞受賞、1991年全国日本学士会「アカデミア学術賞」受賞。

### 生物生存の原理

あらゆる生物は細胞より構成されている。

あらゆる細胞は自己更新という生得の性質を有している。

この自己更新の際、あらゆる細胞は自己保全、種族保全ならびに進化の原理に則って行動する。言い換えれば、少なくとも生物生存の原理に基づく限り、自然死を除いて、細胞というものは自ら病気になろうとすることも病気で死のうとすることも断じて無いということである。それでは、生物がしばしば病気になり、病死するのは何故であろうか。それは、細胞代謝の結果不可避的に生ずる老廃物の蓄積という好ましからざる宿命にのみ起因するのである。換言すれば、その宿命を回避する即ち老廃物を除去する何らかの手段を講ずることができれば、生物生存の原理を全うしうるのであり、ひいては健康と長寿の実現という究極の目的を確保しうるのである。

### 生物の宿命

では、いかなる手段によってかかる好ましからざる宿命を回避しうるであろうか。

水分子はその特有の双極子モーメントの故に分子集団(クラスター)を形成しつつ存在していることが、最新の研究により明らかになった。核磁気共鳴装置による検索によって、水分子のクラスターの大きさを測定することが可能となった。日本における雨水、井戸水あるいは水道水の1H-NMRの平均値(半値幅)は12ないし13ヘルツであるのに比し、電気分解後の陰極水の値は5ないし6ヘルツである。

このことから、電気分解前の原水が12ないし13コの水分子から構成されているのに対して、電気分解後の陰極水は5ないし6コの水分子から構成されていると考えられる。

「小さな水」即ち小さいクラスターから構成されている水は、より容易、迅速に細胞壁を通過し、その結果細胞内の老廃物を一層効率的に運び出すと考えられるのである。

従って、「小さな水」は体細胞のみならず腸内微生物の本来の機能を促進し、さらには生物生存の三大原理即ち自己保全、種族保全および進化の原理の維持に貢献することが可能であるといえよう。

## 小さな水と細胞代謝

近年における微生物学の研究によって、百種百兆個の微生物が消化管の中にすんでおり、消化、吸収、解毒および免疫に極めて重要な役割を果たしていることが明らかとなった。これらの微生物は種々のホルモン、酵素、ビタミンの生成にも関与している。要するに、腸内微生物は私たちの健康と長寿の本質的な鍵を握っているということである。ここで、腸内フローラ(微生物叢)の意義と役割を再考してみよう。生物生存の原理から考えて消化管内の百兆個の微生物即ち腸内フローラが私たちを疾病あるいは死に追い込むべく行動することはありえない。何故なら体細胞の疾病あるいは死はよりもなおさず彼らにも疾病あるいは死をもたらすことになるからである。自ら病気になるべく行動する微生物もなければ、仲間の微生物を病気に追い込むべく行動する微生物もありえない。同時に、腸内フローラ全体としても彼らの仲間である体細胞を病気に追い込むべく行動することはない、何故なら仲間の病気や死は回りまわって彼らにも病気と死をもたらすことになるからである。百兆個の腸内微生物を百兆個の体細胞は緊密に関連しあい、相互依存、共生の関係にあり、健康と長寿という両者に共通の目的を共有しているのである。

細胞、微生物あるいは生物にとっての唯一の望ましからざる宿命とは、代謝老廃物の細胞内蓄積である。換言すれば、それら老廃物を可及的迅速かつ効率的に除去することに成功することができれば、生物に生得の機能を発揮せしめることができるといえるのである。「小さな水」はより容易、迅速に細胞壁を通過、細胞代謝に関与したのち代謝老廃物をより効率的に細胞外に運び出すであろう、というのが私の提言である。

「小さな水」は、細胞ないしは微生物の本来の機能を覚醒させるばかりでなく、促進するであろうことが期待されるのである。

生物生存の原理の教えるところは、いかなる細胞、微生物といえども自らを傷つけることもなければ、またそれが体細胞であれ腸内微生物であれ、彼らの仲間を傷つけたりすることもないということである、というのもそのような行為は彼らが生存し、行動するに際して依拠する原理そのものに完全に反することになるからである。

腸内フローラが腐敗性病原物質を產生し私たちを病気あるいは死に追い込むなどということは、生物生存の原理に決定的に反するのである。

結論として、「小さな水」はあらゆる細胞ないし微生物に本来の代謝機能を回復させ、充分に発揮せしめうる、と期待されるのである。

## 人体構成細胞二百兆個説

これまで、人体は百兆個(60兆個)の細胞より構成されていると言われてきた。

しかしながら、この考えは正しいものであるとは言えない。この数値は体細胞の数のみを意味しており、腸内微生物が考慮に入れられていない。人体は百兆個の体細胞と百兆個の腸内微生物をあわせた総計二百兆個の細胞から構成されていると言うべきである。

ここで、細胞というものと微生物というものの間には何ら本質的な相違は無いということを認識しなければならない。というのも35億年前の海の中に誕生した単細胞生物こそが地球上の全ての植物ならびに動物にとっての单一共通祖先であるからである。

微生物とは、人体を構成している全ての細胞の先行生命体に他ならないのである。肝臓、すい臓あるいは腎臓などの体細胞器官の機能を検索するのに、腸内微生物の機能と切り離して論することは本質的な誤りであり、また不可能である。何故なら人体とは一個の完成された統合生命体であり、そこでは人体を構成する二百兆個の細胞と微生物は緊密なる相互関連、相互依存、共生の関係のもと、健康と生命の維持という両者共通の責務を分担遂行しているからである。

医師は、体細胞器官の機能にあまりにも多くの関心を払う一方で、腸内フローラ細胞の役割には殆ど関心を払っていないのである。

血清あるいは尿中の代謝産物の数値というものは全て、体細胞器官による代謝機能ならびに腸内フローラによる代謝機能の両方によつてもたらされた代謝産物の合計値に他ならないのである。人体の代謝は総計二百兆個の細胞の提携によって営まれ、維持されているのである。腸内フローラの機能と切り離して体細胞の機能を検索しようとしている現代医学の方法論は再検討すべきである。このような方法論は誤っており、患者の診断と治療において誤りをおかすことは避け難いと言えるのである。

現代医学は新薬の開発、テストならびに評価に際して動物を使用するのを常としている。しかし、この常法は慎重に再考されるべきである、何故なら動物の種によって腸内フローラはかなり異なっているからである。マウスとヒトでは腸内フローラは全く異なっている。経口投与された薬剤による代謝の変化は、異なった種の腸内フローラの性質と種類によって全く違ったものになりうるのである。このように考えると、マウスの治療に有効であるといわれる薬剤がヒトの治療にも有効であるという保証は無いことになる。

私たちは今や、人体は二百兆個の細胞より構成されていると理解しなければならない。

## 二重臓器説

ミミズとヒトを比較する時、ミミズには肝臓、すい臓、腎臓などの独立した臓器はないにも拘わらず生きていることを不思議に思わざるをえない。私たち人間は肝臓、すい臓あるいは腎臓を取り出されたら数分以内に死んでしまうにちがいない。

私の考えでは、ミミズの消化管の中には肝臓、すい臓あるいは腎臓の働きをしている微生物がいるに違いないと思われる。それらの微生物はそれぞれ一次肝臓もしくは原始肝臓、一次すい臓もしくは原始すい臓、一次腎臓もしくは原始腎臓とでも定義することができよう。ラマルク・ダーウィンの進化論から言えば、これら一次もしくは原始器官細胞がそれぞれに対応する二次もしくは独立器官に進化したと考

えることができよう。

私の考えでは、高等動物を含めヒトは肝臓、すい臓、腎臓などの独立器官のみでなく、同時に原始肝臓、原始すい臓、原始腎臓も所有していると思われる。

このように考え、私は「二重臓器説」を提唱したいと思う。

この二重臓器説に従えば、人間は原始肝臓、原始すい臓、原始腎臓のみでなく、同時に原始卵巣、原始睾丸、原始甲状腺、原始副腎、原始脳下垂体なども所有しているということになる。そして、原始すい臓が今もなお依然としてインシュリンを、原始卵巣がエストロジエンとプロジェステロンを、原始睾丸がテストステロンを、原始副腎がステロイドホルモンを分泌している、と仮定することも決して不合理とは言えまい。

腸内微生物の中には、酵素を生成するもの、ホルモンやビタミンを生成するものもいることが知られている。酵素を産生している微生物は酵素産生能を持つ肝臓細胞の先行生命体であり、女性ホルモンを分泌している微生物は女性ホルモン分泌能をもつ卵巣細胞の先行生命体に相違ないということもできよう。

もし私たちが二重臓器をもっているとするなら、独立器官の機能と代謝にのみ注意を払い、腸内フローラ即ち原始器官群の役割を考慮しないとき治療上の過誤をおかすのはけだし当然であるといえよう。

## 原因および誘因説

液体、固体および気体の三相を自由に変化する水は、現在までに認知されている何十億もの惑星群の中で地球上にのみ、その存在が確認されている。

そして、生物もまた地球上にのみその存在が確認されている。

これらの事実から、地球上の水の存在が生物の誕生および生存を可能にしたと結論すること、さらには、水の良否が生物の良否を規定するに違いないと結論することができよう。五十万種を数える植物および百万種を数える動物、地球上の全生物は一般にDNA生物とよばれている。DNAは炭素、酸素、水素、窒素の四元素から構成されている。これら四元素は地球上のみならず、水星、金星、火星および太陽系を形成する他の惑星上にも存在している。

それでは何故、これら四元素は地球上にのみDNAおよびDNA生物を造りえたのであろうか。

それは、とりもなおさず他の惑星上ではなく、地球上にのみ「水」が存在していたからである。地球上の水がDNA、およびDNA生物の誕生を可能にしたのである。

従って、水の状態がDNAおよびDNA生物の状態を規定するに違いないとの結論に達しえよう。いま、「病気」とは「DNAの非正常状態」であると定義するとき、「病気」とは「水の非正常状態」であると定義できるのであろう。何故なら「水の存在という原因」が「DNAの存在という結果」を招來したが故である。

細菌あるいはウィルスがそれぞれに対応する病気の原因であるというのが、私たちの一般的な考え方である。

これに対し、あらゆる細菌あるいはウィールスの誕生を可能にした水がすべての病気の原因であるに違ないと結論すべきだ。

このように考えてみると、病気の唯一無二の原因は水であり、細菌やウィールスは病気の誘因と考えるべきであるという結論に達する。換言すれば、細菌やウィールスが生物の細胞の中の「水の非正常状態」を引き起こしたときにのみ、それらは病気を起こすことができるというものである。

これに反して、細菌やウィールスが生物の細胞の中の「水の非正常状態」を引き起しえないとき、それらは病気を起こすに至らないというものである。